
川辺に語る

シバ精神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

川辺に語る

【Nコード】

N1719M

【作者名】

シバ精神

【あらすじ】

川辺で語られる少年と浪人の会話。今、少年の世界が変わる。

(前書き)

かなり短いです。

川辺に語る

今年是不作だった。だから、この村では狩猟が始められる。人々は子供らまで連れて南の山に養分を求める。養分となるものたちは銃声とともにその時間が止める。子供たちは命を奪う生活方法をここで教えられる。

だが、親に従うだけがヒトではない。

ある子はその村男総出の食料調達から隙を見て逃げ出し、森を駆け抜けた。

その先には水が流れる音がする。

森を抜けると、川辺に男が座っていた。

見かけないその男に驚いている様子の子供に、

「サツクの村子か。どうした、いまは狩の最中であるう」と声をかける。

かけられた声により緊張が解れたのか、子供は

「いや、めんどくさくって」と男に近づいてその眼前に座る。

男の前から少年は、好奇心というものからか、

「あんた誰、なにしてんの、どこからきたの、なにしにきたの、なんかおもしろいことない？」

と思いつく質問をいっぺんにぶつける。

それに男は、

「私はただの浪人。清き川を守る君たちに名乗るほどの名は持っていない。いまは考え事をしてた。ここへはこの川のせせらぎが良いものと聞いてな。面白いことというなら、少し昔話をしてやろう。このような村では世界の情報などなかなか入ってこまい」

とほとんどのに答え、言どおり昔話を語り始める。

内容はある戦士の武勇伝。

。「修羅の森」、「超人戦士」、「奇形な怪物たち」、「武芸提供所」。

触れたことのない刺激ある知と、その物語性が少年の何かを熱くする。

そして、話を聞き終えた少年は、いままでの生活を当たり前のものと感じていた村子ではなかった。

その体全体に好奇心が満ち、後に現れてくる概念である夢という言葉はその頭の中でイメージとして表していた。

そんなところに男の呼ぶ声が聞こえる。

「とうちゃんか・・・」と少年の父らしい。

それを聞き少年は、

「おじさん。いつまでここにいる？」と前の男へ問う。

「ここは良い釣り場のようだから、しばらくはいるつもりだ」

と男はその生活内容を含ませてそれへ答える。

その答えに

「だったらまた来るね」

と子供は立ち上がり呼び声のほうへ少し駆けたところで振り返り、

「そのときはまた聞かせてね」

と言い残すとまた呼ばれたほうへ駆け森に消えてていく。

少年は当然怒られたようで、この辺りの風習どおり、滝に打たせる罰が与えられる。

その刑罰は男がいた川原と同じ水流の少し下流のところの滝で行われ、少年はそれを潔く受ける。

しかし、その冷水を以つてしても彼の熱は冷めない。

村では狩猟での得物の加工が行われたが、また少年はそれをサボり、男のもとに現れた。

「これでは、扇動者だ」と村の人に悪いと思い、
「やるべきことをやってから来い。でなければ話さん」と男は少年を帰らせる。

少年は肉の加工を手伝った上、前に怠った狩猟もちゃんと行い、その獲物も家へ持ち帰り解体、加工を済ませて文句のいえないほどの仕事をする。そして、次の日には自由な時間を与えられ、男のもとに駆けつける。

「おまえはできる子なのだ。故に怠情となってしまうのか。高き目標が次から次にあるわけでもないしな」と男は子供を見直した様子。

そして、立ち上がり村ほうを向いて

「私が昨日のようにいったのは、自分が生まれた文化も大切にしろということだ。新しきものに魅かれるのはいいが、それに偏るばかりに本当に価値あるものを見失い、新しきものを知ってからその本当の価値に気づく。なんと悲しい話か。村子よ、お前の住むサツクは、自然愛を極めし文化だ。水流は清められ、山森は無理な搾取がされず、美しい生命循環が作られている。難しい話だろう。しかし、その難しい、見つけにくいあるべき姿を彼らは体感し、実現し、次代へ濁りなくつなげていく。それほど、お前の父は母は、祖は偉大なのだ。そんな偉大な地に生まれたお前を私は羨ましくさえ感じる。だから、簡単に捨てるな、外れるな。お前がいまから話す世界を望まないなら・・・」

と男は、たとえ話を語り始める。

その内容は自然循環を乱し、その再生なく消費され続ける世界、その欠陥に気づかなかつたものたちそれぞれの末路を語るものであった。

しかし、今回、少年はそのうちから何も生まれず何の心境の変化もない。

期待はずれという状態で、「首を傾げる」という触知あつての心身連結行動を体が何らかの形で表そうとしているような様子である。

その少年へ

「つまらないか。そう私はつまらないことも話す。そんなおもしろいのか、つまらないのかよくわからない男に付き合つて、貴重な幼き時間を無駄にするというのは、考えものだぞ。村子」と男は自分から遠ざけようとす。

それにうなずいて少年はこの間の去り際のような明るさもなく、足音もないように静かにゆっくりと村のほうへと帰っていく。

日が登るとともに、昨日世に面白みを感じられないように沈んだ少年は、希望に満ちた顔をしてこちらに駆けてくる。

狩猟以外は世帯それぞれのやり方で生活を成り立たせる行動がなされているこの村。少年の家は加工食品や作物を父が売りにいずこの町へ行っており、やることもいわれていないので自由なことができる。「なるほど、一日寝れば、気分を変えることのできる子のようにだ」

と男がその元気そうな様子を見てみると、それはその言の間に男の前にまで近づき、第一声を放つ。

「おじさん。俺、あんたがした話、みんなに話したんだ。でも、父ちゃんも母ちゃんもぜんぜん面白くなかったみたいだし、友達も「くだらない」っていうし……。どうしてだろ、どうしてあの話がおもしろくないんだろ」と少年の一声は疑問のようだ。

「参考までだ。私の言、そのまま答えとしては困る。なぜか、どうしてか、その答えは最終的に自分で考え、選択するものだ」と注意したあと、

男は「参考までに言うと、それは物語が経験、あるいは生活の必要

にマッチしなかったということだろう。人それぞれの経験、気分によってある文字の羅列を見たときに感じられるものが違い、同じ言語文化であってもその内容の奥にあるものを感じられるか、何を感じるか、そして共感できるかもそれぞれの歴史、状況により違ってくる。それにサククは自然愛を極めしもの、その道とは全く違う道、あるいは相反する道などへ進むを嫌い、それが徹底して教育されている。あるかなしかわからぬ、非常識な話など道に響く雑音でしかなく、生活向上、自然保護に用いることのできる情報、技術は微塵も感じられない。そうであれば、私の話など「くだらない」とするのも当然であり、それでいい。彼らはその道を行けばいいのだ。遠きからの音を気にせず、周辺愛に力を投ずるべし。そうあれば力害が及ぶとも限らない、力害に屈するともかぎらないが、その文化はその良きを知り、そのかけらさえ残ればよいのだ。たとえば、遠きからの力害を与えられ、消え去ることがあっても、その道があつたこと、その愛があつたことは語り継がれ、記憶に残る。そして、その存在が宇宙すべてのものたちの選択肢になり、新たな愛は生み出される。すべては彼らの経験、習慣より選択されること、その道を行くが故、どのように転ぼうと、その存在があつたことが知られればそれでいい」

と己が説を理解できないであろう少年へと男の悪い癖なのか、その説明が長たらしく語られる。

これを悪いと思ったのか、

「難しいことを話してしまつたか。参考にもならないようだ。悪いことをしたな」と男は謝ると、

「詫びだ。お前が好きそうな話をひとつしてやる」とお詫び話を語り始める。

内容はまた戦士の武勇伝。前の人物のことではないようだ。

「窮状を乗り切る知恵」、「不思議な神具」、「魔王」という刺激的知もそうだが、それ以上に子の少年は多彩な技を駆使して戦う武

勇伝的な類が好きなので、そのヒーローがある故にその周辺の知に刺激を与えられ、興味をそそられているようである。

また望む心境を得ていた少年へ

「村子よ、もう私はその衝動を抑えることはしない。その道は己で決めるがいい。その熱きもの、ただ納めておくにはもったいない。それにそうしておいては何かとサツクの害となるかもしれない。未知、その先に今益以上の損があるうと、先に後悔があるうと、好奇心のまま進むのが、幼きものの姿、そのひとつ」と男はその気持ち尊重する。

そして、

「私は明日ここを去ることにする。有意義な時間をくれた礼だ。最後の語りとなる明日は、お前に取って置きをくれてやるう」と男が明日の予告をすると、それを楽しみに思いながら少年は村へを駆けていった。

周辺の村へは一日くらいは掛かる。昨日発ったのだから、父は今日の夕暮れ時には帰ってくるはずである。

村の慣習どおり糞尿を肥料に変える処理を終えるとやるべきことがないので、少年はいつもの場所へ向かおうとする。

その途中、よく見かける、もの運び代行を請け負う業者の姿を目にするが、いつものようにその勧め、頼みはこの村の人びと聞き入れられない様子である。

「あれが「自然愛のため」というやつ？」と男から得た話と関連させそれを見つめている。

そして、いつも見ていた様子である、肩を落とした物流業者の姿も、外界の情報が凝縮された、奥深き存在に見えてくる。

「ファンタジーだな村子。やはり、知らぬものの想像、これほど創造的で、斬新なものはない」

と川原に座る男はその内なる幻想を読む。

それに驚くどころか何が起こっているのかわからない様子の少年。
そんな彼に男は

「突然、現実呼び戻されればそうなるか……。もういいぞ、村子。そう考えなくても、今日の話である程度、その像ははっきりしてくる。そう、この話はお前に近い話だ」と唐突に話を始める。

内容はある男の混沌に満ちた人生。

その男は空間に突然現れ、その空間に起こる争いに巻き込まれていく。

場所を移動しても状況は変わらず、行く先々で争いや困難に巻き込まれ、そんななかを男は切り抜けていく。

場所の姿、事情、その争いの理由、困難はさまざま。

男は、戦士といえるほど戦わず、その知や人柄で窮地を乗り切ることもある。

そしてその物語ではその主体であろう男を見えなくするほど、有能者、星々らが活躍し、物語を動かして存在を輝かせている。

その広い内容からして到底一日で話し終えることのできる物語ではないが、これが夕暮れになる前にはすべて話し終えられる。

武勇伝でもなく、主人公たるべきものたちは、それほど力を持たないであろう男の通過とともにその姿を舞台から消す。

そのように少年が好かんであろう内容であるが……。

彼の体は静止しているが、その大きく開かれた瞳。

そして、その瞳が振るえ体が震えているように見られる様子は、その内に何かを発生させているよう。その物語はあきらかに少年の内なる何かと「マッチ」している。

そんなところに、

「さて、この物語についての私の評価を言っておこう」と男は今までにしなかったことをはじめ。

「この物語は、野々原水松のほらみるという男の動向を追うことにより、この世界の全体的な姿を描き出している。それはその表面から、あるいは空間状況を作りしものたちを主演にすることでその奥深くまで。

そうであるが故に、今の君のように話のなかに自らの、あるいはそれに近い都市の名前が出てくると、現空間と関連させて、物語や今ある空間をより親しく、より深く見るようになる。そして、それに前述、あるいは後述された他都市、他世界の情報が加わると、その空間の全体像から自らの空間的位置を測られ、そこに生きる人びとの思考、方法から自らの文化的、思想的位置、位置でないならその異質性、共通性を比べることもなる。そのことは新たな可能性を発見することでもある。そのように聞き手、読み手に影響する外的で異空間的な知、いずこかにある聞き手、読み手をそこへと導くという作業に補助されているそのような知はこの物語に限らず、あらゆる伝承、書物のなかに存在している。その上で、それらと比べてこの物語のどこが特別で、評価すべきところであるかというところ、やはり全体世界を描いているところ、そしてそれを表すための主体を発見し彼について調べたところにある。そのような内容であるから私は、外知を求めるお前に対しての“取って置き”として、最後の贈り物としてこれを選んだ。このひとつで、お前は知りたかった外世界のある程度の姿を見ることができただろう」

と男は、突然はじめたことを、また長たらしい説明を加えて、この最後の内容、「この物語を選んだ理由」に繋げる。

そのうえ、まだ話を続けるように。

この話をきっかけとして、

「ここで、私についても少し話しておこう」と男は自らについて話し始める。

「この物語は、公的公益的には世界の全体像を描いたということでは評価ができるが、私的、私にとってこの作品はそれ以上の価値を持っている。それは、ミルという世に知れぬ人間の存在が、表され明るみになったというところ、その全文化、全思想に寛容な存在をい

ずこかの土の底から蘇らせたところに大きな価値がある。男はあらゆる道、姿、思想を、それが害道、悪道であろうと肯定し、時にそれと遊び、それを助けて、時にそれを抑え、それを改めさせるようなことはしない。善悪、私公も越えて、宇宙にあらゆる意志があることを美しいものとし、そのうちのひとつでも消えていくのを悲しく思い、儚き夢、志、信念をその命をかけて守ろうと、伝えようと代わって叶えようとする。まさに私のうちに通じるもの、私が理想とするもの、私の経験すべてが共感する存在である。彼は私からすれば遙かな後人ではあるが、この人生のなかでその存在を時間的に空間的な向こうから感じ影響された、まるで私の師であり、私の思想、精神を構成したその根源であるように思える。彼があるから、私はいまこうして川原にかたるのだと」

と部分的ではあるが、男の内面を表す話。
あいつも変わらず長く、その上暑苦しい。

これを、少年は慣れてしまったのか、しっかりと聞いてくれたていた様子。

これを確認すると

「村子、無駄話、感情的な話、いろいろと付き合ってくれたこと、ありがたく思う」

と男は立ち上がり、

「私はそろそろ、ここを離れることにする。お前が世界を知りたいと外へ旅立つか、この村の意志を継ぐか、どういうつもりかは知らないが、この広き世界でまた私の道、お前の道が出会うことがあったら、そのときはまた、「くだらない」話をしてやろう」
と少年を見下げて話し終えると、川の上流のほうへ歩みだす。

「それではまた、死後の世界にでも、来世にでも」とつびやきながら。

少年はその後ろ姿が見えるのを先の感動が消えぬままそれが消えていくまで見め、それが遠くに消えるのを確認すると、立ち上がり

村のほうへと振り向く。

目に映る村、その中央を流れる川、その流れ来る先を隠す山々、それらを支える大地、その広がりをもた隠している地平、星の形、そしてそれらすべてを包む青き天空、その青きものに隠されたその先にある大空間、宇宙。少年が移すもの、世界のそのすべてがいままでのそれとはあきらかに違っていた……。

少年は青年に変わり、また違った心境でこの風景を見つめている。

その経過した時間とともに村に住む偉大なものたちはその意志を次代に受け継ぎ、愛した自然に溶けていった。彼の親も例外ではなく、そうであるから彼はその衝動のまま動く。

遠き「答えは自分で導くもの」という言葉に沿い、奥深き自らの村を背に、広き外界へと……。

(後書き)

これは、私が書いた別小説の序章的なものとして、書いたもの
があるが、思った以上、良いもの。というが、「私的なもの」として
書けたのでこれ一個で出すことにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1719m/>

川辺に語る

2010年10月8日14時35分発行